

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01332

研究課題名（和文）近現代ヨーロッパの強制移住者の生存戦略とネットワーク形成に関する比較史研究

研究課題名（英文）A comparative study on the survival strategy and network making of the forced migrants in modern European history

研究代表者

北村 暁夫（KITAMURA, Akeo）

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：00186264

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、18世紀から20世紀にいたる近現代ヨーロッパにおいて、戦争や国家・社会による迫害などによって空間的な移動を強制された人々を対象とし、こうした人々が移動の過程で自らの生存を賭して行った選択（これを移動戦略と呼ぶ）を明らかにした上で、生存した人々が移動の過程において、あるいは移動先において形成した人的ネットワークの実態を明らかにすることを目的としたものである。

本研究により、二つの世界大戦などの戦禍を逃れて避難した人々が移動した場所はそれ以前から同郷者が移民として向かっていた地域が多いこと（移民と難民の連続性）や、強制移動を余儀なくされた人々を支援する組織の重要性が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、空間的な人間の強制移動をめぐる研究は急速に進展しているが、18世紀から20世紀にいたるヨーロッパの強制移動の歴史に関する実証的な学術研究は十分には行われていない。とりわけ、過去の移民経験との連続性を強調する研究や、強制移動者たちを支援する組織と彼らの人的ネットワークとの関りについて着目した研究はほとんど行われておらず、その点で国際的にも学術的な意義はきわめて高い。

また、2022年に始まるロシアによるウクライナへの軍事侵攻やイスラエルによるガザでの軍事活動などにより、強制的な移動を余儀なくされた人々は日々増大しており、強制移動をめぐる歴史研究の社会的意義はますます大きくなっている。

研究成果の概要（英文）： This research focuses on people who were forced to move spatially due to war or persecution by the state or society in modern Europe from the 18th century to the 20th century, and how these people risked their survival during the migration process. The purpose of this research is to clarify the choices made by survivors (this is called migration strategies) and to clarify the actual state of the human networks that survivors formed during the migration process and at the destination.

This research has shown that many of the places where people who evacuated to escape the ravages of war, such as the two world wars, have moved to the areas where their fellow countrymen had previously moved as immigrants (continuity between immigrants and refugees), and the importance of organizations that support people who are forced into this situation has become clear.

研究分野：歴史学 移民・難民研究

キーワード：難民 移民 ヨーロッパ 戦争 ネットワーク 支援組織 比較史

1. 研究開始当初の背景

(1) 2011年に勃発し、現在に至るまで収束の見通しもたないまま続いているシリア内戦によって、膨大な数の人々が難民として流出した。その数は、2015年の時点までに400万人を超えると言われる。とりわけ、2015年には年間で100万人を超えるアジア・アフリカ出身の難民・移民がヨーロッパ各地に流入し(そのうちの50%あまりがシリア難民であった)、ヨーロッパ諸国はその対応に追われることとなった。この「欧州難民危機」と呼ばれる事態は、ヨーロッパにおける排外主義的な政治勢力の台頭を招き、こうした政治勢力が政権与党となったヨーロッパの国も既に多数存在している。移民・難民問題は21世紀に入ってから、ヨーロッパにおける最も重要な政治的イシューの一つであり続けている。

だが、今日では移民・難民の受け入れに揺れるヨーロッパが、20世紀末まで膨大な数の移民や難民、政治亡命者を生み出してきた地域であったことを忘れてはならない。第二次世界大戦後の難民に限っても、大戦直後にはヨーロッパ全体で2000万人を超える人々が難民化しているし、その後もハンガリー動乱、プラハの春、さらには社会主義体制崩壊後に起きたユーゴ内戦など、幾度となく難民化した人々を生み出してきたのである。そして、その歴史が今日のヨーロッパにおける難民の受け入れに大きな影響を与えてきたことも十分に認識しておく必要がある。昨今、日本ではヨーロッパの排外主義的な風潮のみが強調される傾向にあるが、ヨーロッパが自らの歴史的経験を踏まえて難民を積極的に受け入れてきたからこそ、その反動として排外主義が台頭するのであり、難民を積極的に受け入れない国に難民排斥の動きが生じる余地はないことを承知しておく必要があるだろう。それゆえ、今日のヨーロッパにおける難民を取り巻く状況を深く理解するためには、ヨーロッパ自身が難民を生み出してきた歴史を綿密に検証することが不可欠である。

本研究が構想された背景はまさにこの点にある。

(2) 本研究グループのメンバーの大半は、これまで2011(平成23)年度~2014(平成26)年度科研費基盤研究(B)「近代ヨーロッパを中心とする空間的移動の実践と移動の論理に関する比較史研究」(課題番号23320164)、2015(平成27)年度~2018(平成30)年度科研費基盤研究(B)「近代ヨーロッパを中心とする女性の空間的移動とジェンダーの変容に関する比較史研究」(課題番号15H03260)による共同研究を遂行してきた。これらの研究では、事例として扱った対象の多くが経済的な理由により移動を実践する人々、すなわち「移民」であり、近年の状況を踏まえるならば、戦争や国家・社会の迫害により強制的に移動を余儀なくされた人々に焦点を絞って研究を行う必要があるという認識に至った。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、18世紀から20世紀末までの近現代ヨーロッパにおいて、戦争や国家・社会の迫害などによって空間的な移動を強制された人々を対象とし、こうした人々が移動の過程で自らの生存を賭して行った選択(生存戦略)を明らかにした上で、生存した人々が移動の過程において、あるいは移動先において形成した人的ネットワークの実態を、彼ら/彼女らを支援する個人・諸組織との関係性を視野に入れつつ、明らかにすることを目的とするものである。

(2) オランダの移民史家 J.ルーカセンと L.ルーカセンはかつて、あらゆる人間行動が一定の強制に基づくものである以上、移動が「自由な意志」によるものか、「強制」によるものかを区別することは不適切であり、経済的な理由による移動と政治的・社会的な理由による移動(難民や政治亡命者)を明確に限定することは困難であると論じた(Jan Lucassen/Leo Lucassen(eds.), *Migration, Migration History, History*, London, 1996)。この指摘には一定の説得力があると考えられるが、とはいえ、戦争、自然災害、迫害、国家権力による命令などを契機として生じる移動が、より良い生活を送るために決断された移動に比べて、強制性の程度が高いことは明らかである。本研究は、移動する契機において強制性の高い事例に焦点をあてて、それらの比較研究を行うことを目的としている。

3. 研究の方法

(1) 本研究が採用する方法において、特徴的であるのは以下の三点である。

まず、これまでの研究では個別のモノグラフの集積は進んでいるものの、それらのモノグラフを比較検討するような研究があまり見られないことに着目して、9人の研究者による個別事例の比較研究という方法を採用する。

第二に、移動の過程で自らの生存を賭して行った選択を「生存戦略」という概念で把握し、個別の事例における「生存戦略」の具体的諸相を明らかにするという方法を採用する。戦争や政治的・社会的迫害によりそれまでの居所に留まることが不可能となった人々にとって、選択の余地はきわめて限られたものである。しかしながら、それでも自らの生存のために新たな居所を求める時に、わずかながらでも選択肢が存在することはしばしば見られる。そこで人々が採る選択=生

存戦略に着目する。

第三に、強制的な移動を余儀なくされた人々が、新たな居所で構築する人的ネットワークと、彼ら／彼女らを支援する個人・諸組織との関係性に着目し、その具体的な諸相を明らかにするという方法を探る。生存戦略の一環として、彼ら／彼女らは新しい居所で人的ネットワークを構築する。また、強制的な移動を余儀なくされた人々にとっての新たな居所が、それまでの人的ネットワークを活用して選択されるという事例も多く見られる。こうした人的ネットワークが、新しい居所において彼ら／彼女らを支援する個人・諸組織といかなる関係を構築するのかについて着目する。

(2) 以上の方法論に基づき、本研究では9人の参加者を四つのグループに分けることとする。

第一グループは、18世紀末から20世紀初頭までの時期を対象として、国家や上級権力により、強制的な移動が行われる事例を対象とする。杉浦未樹と木村真がこのグループに所属する。

第二グループは、第一次世界大戦の戦禍によって移動を余儀なくされた人々を対象とする。青木恭子と平野奈津恵がこのグループに所属する。

第三グループは、戦間期を中心に政権による迫害によって移動を余儀なくされた人々を対象とする。田中ひかる・山本明代・山手昌樹がこのグループに所属する

第四グループは、第二次世界大戦後の強制的な移動を対象とし、移動を余儀なくされた人々を支援する組織の活動を中心に考察する。北村暁夫と一政史織がこのグループに所属する。

(3) 参加者各人は、自らの専門とする地域・テーマにおける強制的な移動の実態について、とりわけ生存戦略と移動中および移動後の人的ネットワークの形成に着目して考察する。次に、提示されたさまざまな強制的移動の事例を比較検討し、近現代ヨーロッパの強制的な移動における生存戦略と移動中および移動後の人的ネットワークの形成に関する理論仮説を構築する。最後に、こうして得られた知見を、同時期におけるアジア・アフリカ・中南米の強制的な移動をめぐる既存の研究と接合し、ヨーロッパの強制的な移動を世界史的な視野のもとに考察するとともに、このテーマをめぐる歴史叙述を試みる。

4. 研究成果

(1) 各年に二回の研究会を開催することにより、参加者各人が対象とする個別事例を提示し、それをもとに類型化、理論化を試みた。参加者の個別テーマは以下の通りである。

・第一グループ

杉浦未樹：18世紀末から19世紀初頭にかけて、南アフリカのケープ植民地から現在の南アフリカ共和国北東部に移動したトレックブア（移動農）を主たる対象とし、これまで「自由闘争神話」のもとで必ずしも「強制移動」と認識されてこなかった彼ら／彼女らが、しばしば自らの意志に反して移動を強制された実態を明らかにするとともに、彼ら／彼女らの移動にともなって移動を余儀なくされた先住民にも着目し、両者が交錯しあつてともに難民化していく過程を明らかにした。

木村真：バルカン戦争後の1913年に、オスマン帝国とブルガリア王国との間で結ばれたコンスタンティノーブル講和条約に基づいて行われた正教徒スラヴ人とムスリムとの住民交換を主たる対象とし、この住民交換がそれ以前の行きに起きていたトラキア地域での反ムスリム武装蜂起鎮圧後の正教徒スラヴ人の移住・避難を前史としており、その際に既に形成されていたトラキア地方出身者の人的ネットワークが住民交換においても最大限活用されたことを明らかにした。

・第二グループ

青木恭子：第一次世界大戦開始から間もない1914年9月に、当初優位にあったロシア軍がドイツ軍の攻勢の前に退却を開始したことで、大規模な避難民が発生したことに着目し、避難民の総数が1917年7月時点で640万人に達したこと、彼らに対する政府の支援が大戦前に農民の国内移住に携わってきた移住局によって担われたこと、避難民が大量に流入した地域の農民世帯は成人男性が徴兵されたことで生じていた労働力不足を避難民によって解消することを期待したものの、避難民の多くは都市部での居住を望んだために、その期待は果たされなかったことを明らかにした。

平野奈津恵：第一次世界大戦中にドイツ軍の侵攻によって生じたベルギー人の大規模な難民化を対象とし、難民化した住民が全人口のおおよそ五分の一にあたる130～150万人に達したこと、その中でも最も多くの難民が流出したフランスは、戦争前にベルギー人農民が季節労働者として出稼ぎを行っていた国であり、避難に際しても、また戦後にベルギーに帰還するに際しても、季節労働者として働いた際に形成されていた人的ネットワークに依拠していたことを明らかにした。

・第三グループ

田中ひかる：ロシア革命に参加したのち、ボリシェヴィキ政権による弾圧を逃れてヨーロッパ・北米に逃れたロシア出身アナキストを主たる対象とし、彼らのなかにはロシア革命の渦中にアメリカ合衆国からロシアに帰還しながら、再びアメリカ合衆国への脱出を余儀なくされた人々もいたこと、ロシアから逃れる過程でアナキズムの再構築を試みた人々もいたこと、イタリア、ドイツなどにおけるファシスト政権による迫害を逃れたアナキストの支援を行った人々

もいたことを明らかにした。

山本明代：戦間期にドイツで研究者として活動していながら、ナチス政権による迫害で難民化したハンガリー出身のユダヤ系知識人を主たる対象として、彼らが自ら難民として他のヨーロッパ諸国や北米に逃れながらも、避難先で研究者としての職を得ることで、難民知識人の救援を目的とした組織（在外ドイツ人学者救援会や大学人援護協会など）を設立していく過程を、物理学者レオ・シラードの活動を中心に明らかにした。

山手昌樹：イタリアのファシズム期に政治犯として国内流刑に処された人々を主たる対象として、これまでの研究が知識人の流刑者を中心にしていたのに対して、実際には労働者階層に属する流刑者が全体の 7 割を占めていたこと、彼らのなかには流刑先の農村において現地の女性と結婚する事例も見られるなど、流刑先の社会と一定の人的ネットワークを形成していたことを明らかにした。

・第四グループ

北村暁夫：第二次世界大戦末期から戦争直後にかけて、戦後にユーゴスラヴィア領となったイストリア半島やダルマチアからイタリアに避難した人々を主たる対象として、総計でおおよそ 25 万人と推計される避難民の多くが 1945 年 4 月の戦争終了後に避難したこと、彼らの多くがユーゴのチトー軍による迫害の犠牲となったと自己認識し、また政府や世論もそのように認識したことを明らかにするとともに、1950 年代以降に作られたローマ市郊外のジュリア・ダルマチア地区の人々のアイデンティティ形成の過程を分析した。

一政史織：ユーゴスラヴィア紛争時にユーゴからアメリカ合衆国に逃れた人々を支援した婦人国際平和自由連盟 WILPF の活動を考察する前提として、20 世紀前半における WILPF の設立過程と初期の活動を主たる対象として、北米の知識人女性を中心に設立された WILPF が東・南欧地域や日本の女性たちと密接な関係を結んでいく過程を分析することで、そうした世界規模での人的ネットワークが戦間期、さらには第二次世界大戦後にいたる長期的な活動を可能にしたことを明らかにした。

(2) 以上の個別事例の集積を通じて、強制的な移動が起こる際には、一定程度の選択の可能性が残されている場合、それ以前の移動（経済的な移動としての移民など）の経験やそれによって形成された人的ネットワークに基づく生存戦略が作動すること、移動を強制された人々を支援する個人や諸組織の活動が有効に機能するためには、そうした支援者・支援組織と移動を強制された人々との密接な人的ネットワークの形成が必要とされることを明らかにした。また、研究遂行の過程で、オーラルヒストリーの手法を取り入れることの重要性が明らかとなり、その方法論について精査した。

(3) 2020 年 2 月以降の新型コロナウイルス Covid-19 感染症の世界的流行により、海外での史資料調査が一時期困難となり、研究の遂行に支障をきたした時期があった。それでも研究期間の後半には海外出張が可能となったことで、研究の遅滞を一定程度挽回することができた。ただ、研究会は遠隔により行うことができたものの、研究成果を社会に向けて発信するためのシンポジウムを開催することができなかった。研究期間終了後とはなるが、今後シンポジウムを開催することにより、研究成果を社会に公開していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 青木恭子	4. 巻 78
2. 論文標題 帝政ロシアのシベリア移住と郷土	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 富山大学人文科学研究	6. 最初と最後の頁 17,41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15099/00022436	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 杉浦未樹	4. 巻 89(4)
2. 論文標題 苦力帽：1840年～1940年の中国人強制移住労働者の帽子をめぐる考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 経済志林	6. 最初と最後の頁 77,106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15002/00025197	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山本明代	4. 巻 869
2. 論文標題 ヨーロッパ移民からみた米国のレイシズム	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 42,53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Miki Sugiura (with Giovanni Favero, Michael-W. Serruys)	4. 巻 43.2
2. 論文標題 A new place for transport in urban network theory: The urban logistic network.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Journal of Transport History	6. 最初と最後の頁 256,276
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/002252662211011	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田中ひかる	4. 巻 29
2. 論文標題 伊藤野枝によるエマ・ゴールドマンの思想の受容について：大杉栄・荒畑寒村との比較を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 初期社会主義研究	6. 最初と最後の頁 174～195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中 ひかる	4. 巻 759
2. 論文標題 Special Issue : David Graeber and His Vision of Freedom : Focusing on the Issues of Labor and Resistance (1) : Women 's Emancipation and Anarchism : Focusing on Emma Goldman, Noe It? and Revolution in Rojyava	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大原社会問題研究所雑誌 = Journal of Ohara Institute for Social Research	6. 最初と最後の頁 22～35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15002/00025138	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本明代	4. 巻 1
2. 論文標題 第二次世界大戦期の強制移動に関するハンガリーの歴史叙述の変容	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2021年度名古屋市立大学特別研究奨励費報告書	6. 最初と最後の頁 10～30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一政（野村） 史織	4. 巻 56
2. 論文標題 20世紀はじめの米国の社会改革運動と国際女性平和運動 エミリー・グリーン・ボルチの民族、国家、国際協調の思想を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アメリカ研究	6. 最初と最後の頁 157～176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11380/americanreview.56.0_157	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木恭子	4. 巻 73
2. 論文標題 第一次世界大戦期ロシア帝国における避難民	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 富山大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 41,65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15099/00020607	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中ひかる	4. 巻 547
2. 論文標題 エッタ・フェーデルンとエマ・ゴールドマン - 自伝Living My Life (1931) の影響についての考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 89,106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山手昌樹	4. 巻 32-1
2. 論文標題 イタリア料理の全体主義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 39,53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34382/00013558	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 一政史織	4. 巻 93
2. 論文標題 19世紀末から20世紀初頭のアメリカ合衆国における女子高等教育とソーシャルワーク : エミリー・グリーン・ボルチの教育と活動を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文研紀要	6. 最初と最後の頁 257, 277
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中ひかる	4. 巻 28
2. 論文標題 アナキズムによる女性の抑圧：大杉栄の「自由恋愛」とエマ・ゴールドマンの「三角関係」の比較から考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 初期社会主義研究	6. 最初と最後の頁 51、76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本明代	4. 巻 989
2. 論文標題 第二次世界大戦期の東中欧におけるセーケイ人の移動と地域の形成	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 134、143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 Miki Sugiura
2. 発表標題 Scarcity, Mass consumption and Sustainability. Dyed and Re-dyed kimono boom in Japan, c.1880-1970
3. 学会等名 WEHC, EHESS Paris (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Miki Sugiura
2. 発表標題 Material Technologies of Empire: The Tobacco Pipe in Early Modern Landscapes of Exchange in the Atlantic World
3. 学会等名 Beverly Lemire, GHC Summer School, EHESS (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Miki Sugiura
2. 発表標題 French Wine Terroirs and Early Modern Dutch Markets.
3. 学会等名 EUA, Antwerp University (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Miki Sugiura
2. 発表標題 Selling Cheap under Rules: Japanese Clothes and Shoes in the African Market, c. 1919-1942
3. 学会等名 Conference Tapestry of Rules, Utrecht University Textile Lab (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Miki Sugiura
2. 発表標題 Dutch Worsted Textiles in East Asia in the Eighteenth to the Nineteenth Centuries
3. 学会等名 Global Japan Colloquium EHESS (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中ひかる
2. 発表標題 アナーキズムの現在と未来を考えるー『アナーキズムを読む』を刊行して
3. 学会等名 静岡近代史研究会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本明代
2. 発表標題 第1セッション越境をめぐる歴史 黄惠聖報告に対する討論
3. 学会等名 第20回日韓・韓日歴史家会議（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 一政（野村）史織
2. 発表標題 第一次世界大戦後の戦後構想と婦人国際平和自由連盟 エミリー・グリーン・バルチの思想を中心に
3. 学会等名 中央大学人文科学研究所「南北アメリカの歴史・社会・文化」公開研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ichimasa-Nomura, Shiori（一政史織）
2. 発表標題 Representation of immigrants and their gender roles: Emily Greene Balch and her social work in the early 20th century United States
3. 学会等名 The 2020 OAH Annual Meeting, The Organization of American Historians（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本明代
2. 発表標題 第二次世界大戦期の東中欧におけるセーケイ人の移動と地域の形成
3. 学会等名 歴史学研究会2019年度大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本明代
2. 発表標題 冷戦期アメリカ合衆国の難民政策と家族 ハンガリー難民受入れと難民支援からみる家族と女性の性別役割
3. 学会等名 日本アメリカ史学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉浦未樹
2. 発表標題 変容する境界線 18世紀のケープ植民地における都市部およびフロンティアの女性移動
3. 学会等名 第69回日本西洋史学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 一政（野村）史織
2. 発表標題 スラヴ系移民像とジェンダー観 アメリカ合衆国セツルメント運動活動家エミリー・グリーン・ボルチの思想
3. 学会等名 第69回日本西洋史学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本明代
2. 発表標題 ハンガリー王国出身の移民女性のジェンダー意識の変容 アメリカ合衆国で発行されたハンガリー語新聞の作文コンクールから
3. 学会等名 第69回日本西洋史学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山手昌樹
2. 発表標題 イタリア・ファシズムの内地植民事業と性管理
3. 学会等名 第69回日本西洋史学会大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 田中ひかる	4. 発行年 2022年
2. 出版社 論創社	5. 総ページ数 304
3. 書名 社会運動のグローバルな拡散：創造・実践される思想と運動	

1. 著者名 Miki Sugiura	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 354
3. 書名 Lee, Robert, and Paul McNamara(eds) , Port-Cities and their Hinterlands	

1. 著者名 北村 暁夫、中嶋 毅	4. 発行年 2022年
2. 出版社 放送大学教育振興会	5. 総ページ数 256
3. 書名 近現代ヨーロッパの歴史	

1. 著者名 北村 暁夫、田中 ひかる	4. 発行年 2020年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 224
3. 書名 近代ヨーロッパと人の移動	

1. 著者名 中野 隆生、加藤 玄、平野奈津恵 ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 388
3. 書名 フランスの歴史を知るための50章	

〔産業財産権〕

〔その他〕

https://euromigration2.jp/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田中 ひかる (TANAKA Hikaru) (00272774)	明治大学・法学部・専任教授 (32682)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	青木 恭子 (AOKI Kyoko) (10313579)	富山大学・学術研究部人文科学系・教授 (13201)	
研究分担者	木村 真 (KIMURA Makoto) (20302820)	日本女子大学・文学部・研究員 (32670)	
研究分担者	一政 史織 (野村史織) (ICHIMASA Shiori) (20512320)	中央大学・法学部・教授 (32641)	
研究分担者	杉浦 未樹 (SUGIURA Miki) (30438783)	法政大学・経済学部・教授 (32675)	
研究分担者	平野 奈津恵 (HIRANO Natsue) (60634904)	日本女子大学・文学部・研究員 (32670)	
研究分担者	山本 明代 (YAMAMOTO Akiyo) (70363950)	名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授 (23903)	
研究分担者	山手 昌樹 (YAMATE Masaki) (70634335)	共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・講師 (32303)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------